

# No. 1271

## 厳戒の中、運航開始

— 成田新東京国際空港 —

成田新東京国際空港建設が閣議決定した昭和41年7月以来12年目、やっと一番機が成田から飛びたった。空港周辺には依然反対派の団結小屋が建ち並ぶ。が、岩山団結小屋と木の根団結砦は「成田新法」を適用し、厳重な監視を続け、やり直し開港を迎えた。5月20日、午前0時新東京国際空港は開港した。1万3千人の機動隊が厳戒体制を敷く中で午前10時30分から開港式が行なわれた。成田12年の傷だらけの歴史を反映してか、空港公園では開港記念の華やかな行事は一切とりやめ、安全祈願の簡素な神事と用地提供者の顕彰碑の除幕式を行なっただけだった。式典に出席した福永運輸大臣は『国内外に不安を感じさせないよう、今後も反対派と相談してゆきたい。二期工事はすぐ手をつけるというのもどうかと思うが、そのまま置いておく訳ではない』と語った。

その頃、三里塚第一公園は開港反対を叫ぶ農民や支援学生で埋った。戸村一作反対同盟委員長は『政府との話し合いは絶対しない。二期工事に関連して向こうは申し込んでくるかも知れないが一切、ノータッチだ。あくまで空港を廃港にする』とあいさつした。この後、反対派はデモ行進に移り、各地でこぜりあいが発生した。

翌21日、薫風の成田空港上空に開港一番機の日航1047貨物便が姿を現わした。管制官の『ウエルカム・トゥ・ナリタ』の言葉に迎えられ南側から4000メートル滑走路に滑り込むように着陸。若林機長は朝田日航社長と握手をかわした。正午すぎ、フランクフルト発モスクワ経由の旅客第一便が到着した。

乗客の一人は『安全性の問題もありますが、何よりも都心から遠いのが困ります』と話す。また記者会見に臨んだ乗員たちは『成田は快適である』とほめたが、滑走路が一本だけという不安は隠せない様子だ。

運航開始2日目の22日、旅客第一便就航記念としてテープカットが行なわれた。厳しい検問に守られて、ともかく運航を開始し、新しい日本の玄関となった成田空港。しかし、12年の長い歳月と多大の犠牲を積み重ねながら、なお、地元反対派農民との和解をはじめ、問題が未解決のまま残されている。